



下横町
しもよこまち

文化年間の製作。鹿沼では小型の屋台。花鳥を主とした美しい屋台で、鬼板と懸魚の芙蓉は一体となり、華麗さを誇る。脇障子は、「額付き明かり障子窓」で、文化・文政期の特徴を示している。



下田町
しもたまち

文久2年頃の製作。彫師は石塚吉明。鹿沼の屋台の中で、箱棟の高さが最も高く、逆に台輪は最も低い。そのため、彫刻の占める面積が広く、覆いかぶさる鬼板の龍と相まって、重量感あふれる屋台。



中田町
なかたまち

天保年間の製作。鬼板の三頭の龍と懸魚の龍の生き生きとした表情や、精巧な籠彫りの玉が添えられた車隠しの「牡丹に唐獅子」など、彫師の巧みな技が遺憾なく発揮された屋台。



石橋町
いしばちよう

文化9年製作。彫師は、菊彫の名手、神山政五郎のほか大出常吉、啓一郎親子。菊を中心に金鶏鳥や小鳥の彫刻が配置される。障子は金色の模様入り組子、絹張り、華麗な姿を誇る屋台。



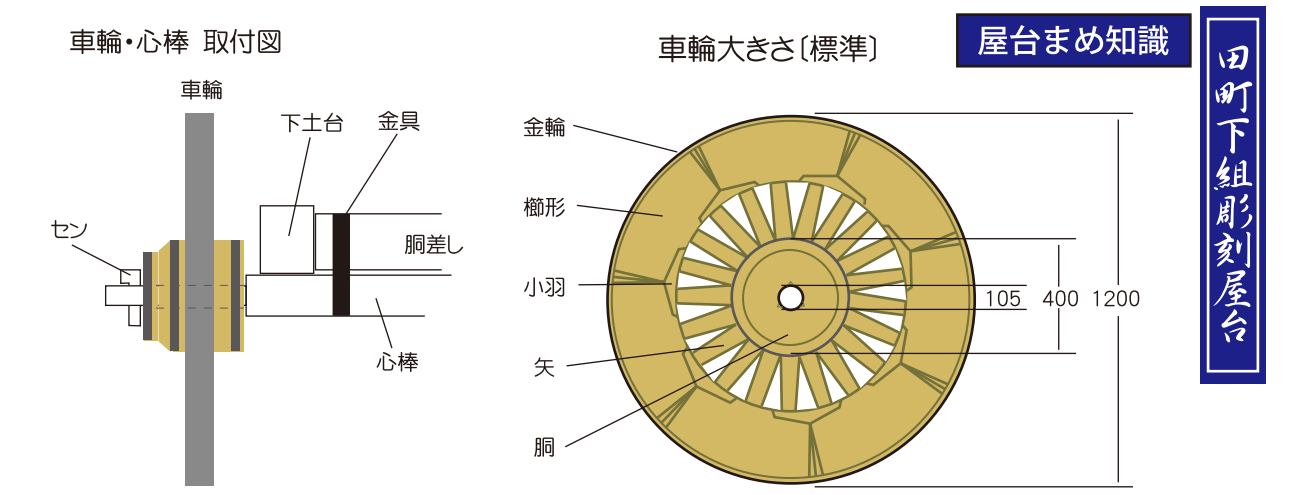
麻苧町
あさちよう

安政3年製作。彫師は後藤音次郎、車体は大工茂八が請け負った、鬼板と懸魚は「牡丹と唐獅子」で、箱棟には丸彫りの獅子三頭が乗る。高覧には旧屋台の金竜が配置され、豪華さを演出。



仲町
なかまち

天保7年製作 彫師は後藤周二正秀のほか、磯辺儀兵衛敏信。鬼板には雄大な波龍、懸魚は玉取りの龍が躍動している。一方、外欄間は繊細な花鳥彫で飾られ、繊細かつ躍動感あふれる屋台。

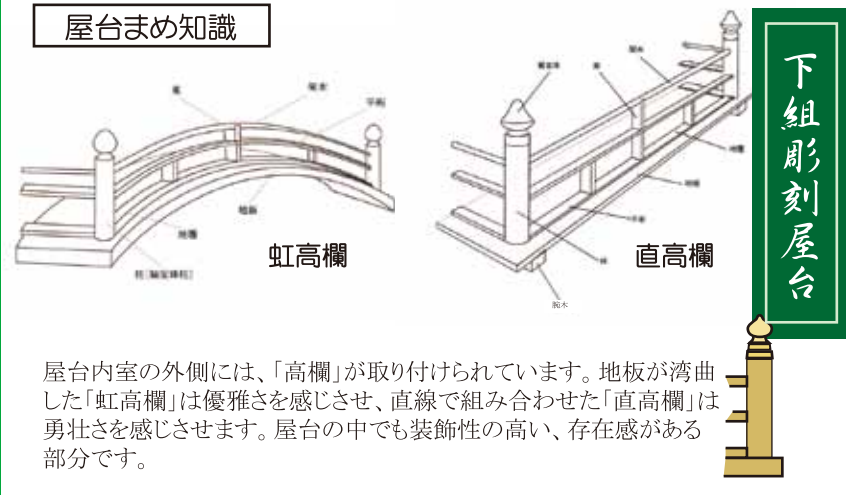


田町下組彫刻屋台



下材木町
しもざいもくちよう

天保3年製作。彫師は磯辺儀左衛門 凡竜斎 信秀。全面が龍で統一され、躍動感あふれる構図となっている。屋根は布張りで、屋根裏まで、朱で塗られるなど、丁寧に造られた屋台。



下組彫刻屋台

屋台内室の外側には、「高欄」が取り付けられています。地板が湾曲した「虹高欄」は優雅さを感じさせ、直線で組み合わせた「直高欄」は勇壮さを感じさせます。屋台の中でも装飾性の高い、存在感がある部分です。



東末廣町
ひがしすえひろちよう

昭和57年製作。車体は大工棟梁 元野勝三、五郎兄弟、宇賀伸久男。彫刻は、辻幹雄など多数の彫師が携わった。鬼板・懸魚には、荒波から竜が天に昇る様を描いている。



末廣町
すえひろちよう

明治15年製作。鬼板・懸魚の「牡丹と獅子」、柱飾りの「葡萄とリス」の彫り物に特徴がある。鹿沼では、数少ない柱飾り彫刻がある屋台。



銀座1丁目
ぎんざいちじようめ

文化11年製作。黒漆塗に白木彫刻という特異な屋台であるが、屋台としては優品で、製作経緯がわかる。彫師は磯辺儀左衛門 凡竜斎 信秀。脇障子の「鷲と猿」の構図は見所の一つ。



鳥居跡町
とりいどちよう

昭和30年製作。車体は大工棟梁熊倉八郎によるもので、彫師は富山懸井波彫刻協同組合。構図は鳥が主体で、雄大な鬼板・懸魚と繊細な欄間が見事な調和のとれた屋台。



蓬萊町
ほうらいちよう

昭和30年製作。車体は大工半貴文太郎、彫師は、富山県の笹川無門賀手がけている。脇障子には鷹、外欄間には鹿沼では珍しい十二支の彫刻が配されている。



寺町
てらまち

昭和3年製作。車体は大工棟梁、半貴金太郎、文太郎親子によるもので、彫師は山口忠志が手がけている。